

米の学会の新しい方法には『域外の事』として、目をそらして、いたことによるのである「と手厳しい。また、海外との比較研究についても、それぞれの土地や民族における話の個性的成長や伝承者たちの個性を考慮せずに、素朴な粗筋だけにもとづいて伝播等を論じる傾向に疑問を呈している。

語り手論にたいする研究は、わが国でも少しずつ成果をうみつあり今後が期待される分野である。松前氏は、オーラル・コンポジションの理論は、語りに定型をもたない伝説よりも、決まつた語り口をもち口承性にとむ昔話において豊かな成果をもたらすのではないかと示唆している。「たくさんの語り手から、それぞれの異伝をきき出すのではなくして、一人の語り手から、何度も、年月を置き、場所を変えて、同じ話をきき出すのである。また特別な人気を持つ語り手の、どの点が人々に受けるのか」ということの調査も必要となる」との指摘は、これから調査研究の一つの方向を示していくと思われる。

徳田氏は、神話や説話、物語や軍記・語り物、歌謡などについて、それらを生み育ててきた不特定多数(集団)の人々の文学行為と、

米の学会の新しい方法には『域外の事』として、目をそらして、いたことによるのである「と手厳しい。また、海外との比較研究についても、それぞれの土地や民族における話の個性的成長や伝承者たちの個性を考慮せずに、素朴な粗筋だけにもとづいて伝播等を論じる傾向に疑問を呈している。

語り手論にたいする研究は、わが国でも少しずつ成果をうみつあり今後が期待される分野である。松前氏は、オーラル・コンポジ

ションの理論は、語りに定型をもたない伝説よりも、決まつた語り口をもち口承性にとむ昔話において豊かな成果をもたらすのではないかと示唆している。「たくさんの語り手から、それぞ

れの異伝をきき出すのではなくして、一人の語り手から、何度も、年月を置き、場所を変えて、同じ話をきき出すのである。また特別な人気を持つ語り手の、どの点が人々に受けるのか」ということの調査も必要となる」との指摘は、これから調査研究の一つの方向を示していくと思われる。

徳田氏は、神話や説話、物語や軍記・語り物、歌謡などについて、それらを生み育てて

きた不特定多数(集団)の人々の文学行為と、

見

（大月書店）を見ても分かるが歴史学者

き方である。

伝承という継続的な言語行為を重視し、つき記録なのである。換言すると、その文献は伝承したい歴史的存在を保証している」と指

「その方法としての伝承は、それじたいの特性からへハナシ・説話・物語の意味をも体

するようになる。その上で伝承文學とした場合、それは反復を基本とする継続的、集団的

な表現活動につちかわれて文芸性を發揮した作品群にはかならない」

「伝承」については、口頭伝承に限らず「文字を媒体にして、あるいは書写を繰り返して、伝わっていく書承の場合もある」点を強調する。「文献はまた一時期の伝承状態の

（つねみつ・とおる／桐朋学園大短大部講師）

本書に収められた論考は、冒頭で福田氏が説く「伝承文學」における口承と書承との交錯する領域、そのかかわりを軸に展開されている。ここでは、その理論面について書かれた部分を取り上げたが、いずれの論文も具体的な資料にもとづく論を展開していく刺激的である。

三弥井書店 四五〇〇円

書評

吉沢和夫著

『民話の心と現代』

櫻井美紀

1 本書の構成と特徴
本書の構成は三部から成り、「I 民話を伝承する心」「II 語りと再話をめぐって」「III 著者の吉沢和夫氏は、前書の『民話の再発見』（大月書店）を見ても分かるが歴史学者

であり、民話の研究者であり、「日本民話の理論面を担う重鎮である。したがって

解説書

とみることも可能であろう。

著者の吉沢和夫氏は、前書の『民話の再発見』（大月書店）を見ても分かるが歴史学者

き方である。

質問者が、「——ところで、……について微の一つである。

はどうでしょうか」と尋ね、それに対しても回答者が「まず、……の問題があるでしょうね。

柳田国男氏はこういっています……」のよう

に続く。また質問者が「——なるほど……

なのですね」というと、回答者は「しかし、一方に……が考えられますね」と解説をする。

論文形式の堅い解説書が多い中で、民話論も従来は堅く書かれていたが、この進め方はイメージを一遍に崩した斬新さである。質問者と回答者の文の間は一行あきとなっているので、非常に読み易い。「——はいはい分かりました。で、ついでといつては何ですが、……」などと続くところ、いかにも著者のフランクな人柄が滲み出て、工夫のこらされた、好感の持てる書き進め方だと驚いた。

それが読み易いと同時に、「ズバズバ」あるいは「きっぱり」と論じてほしい問題点を曖昧にした部分もあるのは否めない。引用文も多いので、そのあと著者の論旨が起点から遠くなり、その分、弱まる結果になる。問答形式の書き方の是非については読者の意見が分かれると思うが、これは本書の大きな特

徴の一つである。

2 語りの今日の状況のとらえ方

さて、一足飛びに、私の気になっていたところへ移ることにする。

Iの「いまなぜ民話か」の中に「民話をめぐる今日の状況」の項目がある(P.11~14)。

民話は語り継がれなくなつた、ということに對して、回答者は「いいえ、違います。肉声の語りは今もなお聞く人の胸を打ち、感動をよびます力をもっています」(P.12)と続いている。その項目の終わりには「そこにはきっと語りがある……語りを支えるものは人ととの出会いです」(傍点リ吉沢、要約リ櫻井)となつてている。

ここは「いまなぜ民話か」で論ずるよりも、「いまなぜ語りか」で論じなければならぬところではないだろうか。

この五つ以外の、現代の語りの状況は、現代の民話の状況と切つても切れぬものであろうし、本書のメイン・テーマである「再話」について解明するには、現代の語りの全国的な様相を、簡略にでも取り上げた方がよかつたと思う。ごく簡略に述べるなら、次のことが

① 松尾敦子さんの昔語りの公演
② 小沢重雄さんの公演
③ 日本民話の会の「語りの勉強会」
④ 「語り手たちの会」

⑤ 「全国語りのフェスティバル」

(この④と⑤は、私の関係しているものなりが)この五つの例だけでは、取り上げ方に偏りがあるといわねばならない。

なぜなら①と②は「日本民話の会」の仲間で、と断りがあるが、①から③までは著者のかかわる会の仲間の活動である。あとに続く④はその活動の説明がなく、⑤は、正しい名稱は「全日本・語りの祭り」のことであらうと思う。自分の関係しないところは無責任に書かぬという著者の態度ではあるが、本書のタイトルからは、現代の語りの様相を知らせるページが必要なのではないだろうか。

この戦後五十年の言語の伝承の移り変わりは頗著なものだが、この三十年ほどの間の変化はめまぐるしい。各地の民話の語りの名手とし

て貴重な存在であった、資料に名の残る語り手の方々が次々と亡くなられ、一方、新しい語り手が輩出した時期である。

その三十年の間に、日本では、「語り」も「語り手」も多様化した。視覚文化とマスコミが口頭伝承の世界に入り組んできた。図書館の児童奉仕のための「おはなし」が普及した。民話の語りも民話の語りの状況は、多岐に亘って動きの出てきた時期なのである。

④の「語り手たちの会」は全国的な活動団体ではあるが、市民文化活動の団体は全国でそれぞれに活動していく、各地の民話の語りの活動と深くかかわるところもある。地域の集会・学校・児童館・保育園そのほか様々な場へ出掛けで語る現代の語り手たちは、全国的に多く（このことは本書一〇四ページに触れられているが）、分かっているだけでも二三〇グループある。一〇〇〇人、あるいは二〇〇〇人近い人々が、様々な場で語りの活動に加わっており、多かれ少なかれ、民話ともかかわっている。

（⑤）は、一九九二年から隔年に開催されるイベント「全日本・語りの祭り」として、六ないし八の団体から実行委員を出して運営される。参加者数は第一回の四〇〇名から第二回は八〇〇名に増えるなど、語り手の意欲の現れがあり、ここでも毎回、伝承の民話の語りと現代の民話の語りを重視している。

歴史的に見ても、日本の民話を新しい方法で口語りにする人々（＝口演童話家）が出現したのは明治期なので、その影響も全く無視する説にはいかないとと思う。明治・大正時代の学校教育の場で行われた民話は、各地の素朴な民話の語りに多少の影響があったであろう。そのように、①から⑤以外にも、児童文化に関する様々な動きがある中で、日本の民話の姿が変わってゆき、また民話の語りを変えてゆくであろうことが予想されるので、視野をより広くして触れる必要を感じた。

3 再話の問題について

「本書の底流として一貫して流れている視点は『再話』の問題である」と、あとがきにある。吉沢氏は再話については筆頭に挙げらる研究者なので、本書で再話について多くの紙面を使い、例文も豊富に引用して論じら

れているのはもつともと思われた。

さて、「民話の伝承と再話」の第一の項目の初めの数行は、次のように書かれている。

民話を再話するとはどういうことなのかと聞かれたとき、最も納得のいく答えは、それは筆による語りであるというこそである。（中略）敢えて筆による語りは、民話というものが本来伝承といいう行為によってはじめて存在するものであり、再話もまた広い意味での伝承といいう行為に参加するもの、あるいは参加できるものでなくではないまい、と考えるからである。「筆による伝承への参加」と言つたらいいだろうか。（傍点＝吉沢）（イ）

それに続き、全国の語りを中心とする団体やサークルに触れているが、次のように書かれたところがある。

それらの（語りを中心とする）団体やサークルのほとんどで、作家による民話の再話作品が語りのためのテキストとして取り上げられているらしい。朗説ではなく、ほかならぬ語りのためのテキスト

としてある。(傍点) 吉沢(口)

(口)の部分について先に述べておきたい。著者は、作家の再話作品を語りの団体やサークルで語ることを非難しているのではなく、肯定して「筆による語りの伝承への参加の仕方は、こうした団体やサークルとの結びつきだけではなくて、伝承昔話の本格的な伝承者とも結び付いて彼らの語りの内容に影響を与える場合もあることを私どもは知っている」となっている(一〇五ページ)。私は以前、「語りの団体やサークルで、テキストどおりに覚えて語る方法が多く行われている」ことについて、ある学会で発表したことがある。そして、「テキスト重視が多い」のが現状であることも承知している。しかし、前述したように、現在日本中で多様な新しい語りが行われているとき、テキストどおりの語り方がすべてであるとは思わない。語りの団体が作家の筆による再話作品を語ることだけをしているように受け取られるのを遺憾とせねばならない。

(イ)の部分について、「再話とは、筆によることであり、語りである」の言葉には納得できないものがあるので、少々の反論をしたいと思う。され民話集のみで見るなら「筆による語り」となるであろう。しかし文字で書かれた民話と、聞き手を前にして語り手が今までに語っている民話——つまり時間的にも空間的にも同時に共有する民話の世界と、どちらが生きている創造であろうか。まず、口語りの再話がそこにあるのである。祖先から伝承されたことはを、語り手は目の前にいる聞き手に語る。その語り手の口から出てくる話が、いうまでもなく第一義の再話であろう。伝承の語り手は人から聞いた話や物語に、自分のことばを織り込んで語る。語り手の、口から出てくる再話があつて、それをもとに書き手が再話をしているのである。筆による語り帖の『扉のことば』)が掲げられている。は、第二義的な語りである。後世に残る、といふことば(「日本民話の会」の機関誌『民話の手とば』)が掲げられている。一五八ページに、民話運動のよびかけのこ

本書では、出版された昔話資料や出版された民話集のみで見るなら「筆による語り」となるであろう。しかし文字で書かれたく触れられ、著者の思想がそこで述べられる。語り口、文体、再創造の適確な提示は、民話を勉強しようとする者にとって丁寧な指導書となる。

4 現代の語りに民話の心を

本書は、吉沢氏の民話運動論の集大成といえよう。歴史的に民話を述べ、民話の方言の豊かさを述べ、戦後の民話運動の思想性について、十分に述べられている。

一五八ページに、民話運動のよびかけのこ

う点においてなら、筆による再話は口語りによる再話より優勢なのである。「優れた再話」というときは、「どう語るか」が大切なのであり、「どう語るか」の方法に「口で語る」と「筆で語る」の二方法がある、ということであろう。現代の語りを論ずるときも、口で語る再話をも考慮に入れてほしいと思う。

会・高度情報化社会・都市化社会・学校教育の荒廃の問題を始めとして、子どもの育ち方や家族関係、人間性疎外や感情の不安定さ・孤立といった問題に深く立ち入っている。民話運動の今後についても、これらの現代社会の諸要素と切り結ぶ姿勢が求められるのである。

民話の世界は素朴な魅力に溢れている。本書には、土地の言葉で民話を伝承してきた語り手の語りについて語ったエピソードが多く述べられているが、それらの語り手と著者は

真摯に向き合い、信頼し、あたたかく見守り、また謙虚に学ぶ姿が随所に浮かび上がる。佐渡の優れた語り手であつた松本スエさんの「当たり前だ。サルの奴は殺さればなんね」という言葉から民話を伝承する心を説き起すところ（三二ページ）に始まり、要所要所で語り手が語った言葉をもとに「伝承の心」を拾い出している。堅くならず、

あたたかい著者の視点が読者に伝わる部分である。本書が、昔話研究者の見落としている点を、多々掲げていることを、高く評価したい。著者が本書で、生きている人間としての語り手を問題としているところに、私は

大きな感銘を受けた。

この拙文で、一方的に「語り」について取り上げたことを、著者にも読者にもお許し頂きたい。何故なら、私は語り手の末席に連なる者で、その立場からの発言を、まず表明しておきたいと思ったからである。

最後になつたが、本書の目次を挙げて責任を果したいと思う。

I 民話を伝承する心
いまなぜ民話か／民話とは・再話とは／殺されるサル——生産者の視点／ニワトリが鳴くとなぜ鬼や天狗は退散するのか——時間の習俗／盗人の神様——伝承する人の心／笑わぬ女が笑つたとき——

雪深き里の炉端の語り手・宮下石之助さん／佐渡海府の語り手たち／遠藤登志子さんに聞く
(さくらい・みき／語り手たちの会)
（白水社、二二八頁、二〇〇〇円）

事実と民話との距離／ふるやのもりは本当に怖い——生活に根ざした伝承

II 語りと再話をめぐって
民話の伝承と再話／再話／再話の岐れ路／民話の採訪・記録と民話運動——福島県国見町の採訪から学んだこと／民話運動からみた「語り」／採訪と記録の心得

III 語り手たちとその語り

書評

モノとしての「話」

／佐藤健一『流言蜚語』から

重信幸彦

口頭伝承研究や民俗学において現代の日常生活が産出する「話」を素材にすることは、いではない、としておこう。だがこうした動向は、これまでの民俗学／口頭伝承研究を再